

# 門前町に生きる

— 過去・現在・未来 —

## 第5回 ユニホームが木箱の中から

— 野球部復活その2 —

戦時中、野球は敵性スポーツということでストライクを「よし」、三振を「それまで」と言い換えていた。しかし、戦地ではそのような制約はなかったらしい。敗戦になってから復員兵が帰ってきた。そのために戦後間もなくは成田の町へもたくさんの方が集まってきた。

成田中学校で野球選手として活躍した岩瀬さん・川口さんの二人が復員して成田に戻り、後輩が練習するのを毎日見に来て指導をしてくれた。この二人は成田中学校の野球部の基礎を作ったといわれている。もともと成田は昔から野球が盛んな土地柄で、太平洋戦争が始まる前は、旧成田の門前町では社会人野球の対抗試合をやっていた。これには土屋も囲護台も参加しており、現在成田祇園祭で山車・屋台を出す町内がその対抗試合の町内に当たる。そのことも手伝って成田中学校の野球部復活は早かった。戦後初の第28回全国中等学校優勝野球大会に出場したチームのうち、内野手はすべて当時旅館の息子だったというのも興味深いことである。

復員した中に石原照夫さんがいた。初めて全国大会に出場したときの投手である。彼は甲種予科練へ行っていた。甲種は中学3年から行くコースであったが、敗戦で成田中学校に編入してきた。彼の兄も野球が大変上手であったが、都合で岩手県の遠野中学校へ転校してしまったという。木下辰己さんは駿河屋の二男で、陸軍幼年学校へ進んだ。戦時中は石原照夫さんの1学年上であったが、戦後復員が遅れて成田中学校では照夫さんと同学年になった。こうして戦地から戻った者を含め、元気あふれる仲間が集まって、年齢を超えた同好会のような練習が続いていたのである。

小野寺賢蔵さん(福岡県在住、昭和6年生まれ)は、旅館魚田丸家の息子であった。野球部再開間もなく、皮製グローブを東



戦後初の大会第1試合で京都二中と対戦。6回裏、石原利男選手の中前打で石原照夫選手が2塁から本塁へ突入。ベンチも観衆もホームインを疑わなかったが判定はアウト。監督の手招きで笑顔でベンチへ戻る姿は、数万大観衆の心に強く印象付けられた(成田高校提供)

京で買い求めて使った記憶があるという。旅館の子どもたちは早い時期に新しい皮製グローブを入手できたようだ。復活間もないころの練習はみんなはだしであったし、ユニホームはなく汚い格好をしたという。ボールは軟式であった。電話取材中、小野寺さんが、どうしても伝えておきたい思い出があると語り始めた。ある日、小野寺さんは剣道部の辺田部長に呼ばれ、倉庫のような部屋に連れていかれた。そこには木箱があり、辺田部長が「いつか着られる日が来るからと思って取っておいたんだ」と箱の中を見せてくれた。中にはユニホームがぎっしり詰まっていた。辺田部長の「いつか着られる日が来るから」という言葉が忘れられないと、小野寺さんは遠い過去を思い出しながら語ってくれた。

そして、どの学校との練習試合だったか、時期も会場もすっかり忘れてたが、と前置きしつつ、「いつもは汚い野球着しかなかったのですが、そのときに保管されていたユニホームを着たんです。観客はユニホームが保管されていたなんてことは、まったく知りませんから、そろいのユニホームを着たわれわれを見て、よほどびっくりしたみたいでしたね」と語ってくれた。西宮球場で行われた戦後初の大会に着たユニホームがそれであった。「いつか着られる日が来る」と信じ、誰にも相談せずに個人の責任で保管していた人がいた、そういうことを是非記録に残してほしいと、熱く語ってくれたのである。昭和20年代はるか昔になって、戦中戦後の記憶を手繰るのが難しくなっている現在、一つの貴重な証言である。

(板橋春夫)

## 編集後記

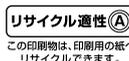
ことしもあと半月。パソコンの写真データを見て、自身の1年を振り返りました。2月9日のフォルダには、雪に覆われた市内の写真の数々が、18ページのようにこの時期、降雪時対策として自宅前の除雪作業をお願いします。わが家でも降雪予報に備え、前もって雪かきスコップを1本購入。ところが、あまりの雪の量にそれでは足りず、普通のスコップやちり取りを使い家族で雪かき作業に追われた当時の記憶がよみがえりました。



平成26年12月15日号 No.1281

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。